

小学校国語科における説明的な文章を教材とする 「読むこと」の学習指導の改善

群馬大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 授業実践開発コース

塩谷 啓子

1. 研究課題

近年の大規模学力調査において、我が国の児童・生徒の論理的思考力に課題のあることが指摘されている（cf., OECD, 2018；国立教育政策研究所, 2019）。小学校国語科の学習指導において、説明的な文章を教材とする「読むこと」の授業改善によって、論理的思考力の育成を図ることは重要な課題と言える。

内容理解にとどまらず、読んだ文章と自分の知識や経験等を結び付けて感想や考えをもち、それらを他者と共有することを通して自分の考えを深める学習過程についての指導が求められている（文部科学省, 2018）。「考えの形成」、「共有」の学習過程についての指導の充実が今日的な課題と言える。

近年の学習科学の進展は質の高い協働学習が成立する条件を明らかにしている。ソーヤー（2018）によると、足場かけ、外化、振り返りといった学習環境を構成する要素を取り入れることで、児童の学びは促進されるとしている。

このような学習環境デザインを具体化するために、国語科の学習指導において、「考えの形成」や「共有」の学習過程の足場かけとなるツールの導入が試みられている。例えば、細川・北川（2018）は、読解プロセスにおいて児童の思考を可視化するツールを使うことにより、児童の自発的な話し合いを通して主体

的に学び合い、思考力を育成することができるとしている。

置籍校におけるアンケート調査の結果からも、説明文の授業における学習活動について、「考えの形成」、「共有」の学習指導が不十分だということが示された。説明文で使用されているワークシートの設問を分析した結果、「構造と内容の把握」、「精査・解釈」の指導が主で、他者と協働して課題に取り組む「共有」の学習過程を意識したレイアウトになっていないことが明らかになった。

上記の議論を踏まえ、「考えの形成」や「共有」の学習過程の充実のため、本研究では、小学校国語科における説明的な文章を教材とする「読むこと」の授業を「主体的・対話的で深い学び」の視点から改善する試みを通して、児童の学びの質を高める指導方法について明らかにする。

2. 研究の方法と内容

令和3年度M市立公立小学校6年4組（32人）の児童を対象に、小学校国語科における説明的な文章を教材とする「読むこと」の授業改善のためのアクション・リサーチを行った。

「主体的・対話的で深い学び」の実現のため、次の5点について授業改善に取り組んだ。

- a 聴き合う学びの作法についての指導
- b 児童の課題解決に必要な足場かけの用意

- c 「見通し」と「振り返り」の実質化
- d 論理性を意識した思考ツールの導入
- e 児童の思いを大事にした学習課題の設定

3. 実践結果と考察

(1) 1学期の実践の概要

1学期の実践（以下実践①）では、文章について考えをまとめ、それを他者との聴き合いを通して、自分の考えを広げる言語活動を設定した。実践上の手立ては、次の3点である。1点目は、思考ツール「ステップシート」を取り入れ思考の外化を行ったことである。

「ステップシート」は、考えを伝えたり整理したりするとき、部分と部分のつながりを意識して考えを表すことができるツールである。「ステップシート」に、自分の考えを書き、それを各班に配布したホワイトボードに貼り、聴き合いを行った。その後、「ステップシート」に赤色で付け加え等をする時間を設けた。2点目は、児童が目的意識をもって取り組むことができるような課題設定を行ったことである。何について学ぶのかを明確にするため「心の動きは、体や時間とどのように関わっているのか、日常生活を振り返ろう」という課題を、教師の投げかけから設定した。

(2) 実践①における児童の学びの姿

実際の授業において、以下の児童の姿が捉えられた。1点目は、文章に対して、自分の考えをもち、聴き合うことを通して、それを広げたり深めたりする様子が見られたことである (Figure1)。このグループでは、「ステップシート」の発表にとどまらず、グループ全員でテキストや資料を基に、自らの体験と筆者の事例とを比較しながら、互いに質問し合う質の高い聴き合いを行っていた。2点目は、聴き合いを通して、自己の読みを更新してい



Figure1 互いの考えに関心を寄せる児童

る様子が見られたことである。児童は、当初、具体的な事例の記入はなかったが、聴き合いの中で、事例を入れることで、自分の考えに説得力が増すことに気付き、修正していた。

(3) 実践①の成果と成果

授業における児童の実態から、「考えの形成」と「共有」の過程における学びの質が高まっていることが捉えられた。1点目は、聴き合いを通して学ぶ作法を児童が身に付け、主体的に学習に取り組んでいたことである。2点目は、自他の考えを比較し、自らの学びの洗練化を図ろうとする学びの対話性の向上である。3点目は、聴き合いを通して、自己の考えを他視点から見直している学びの質の高まりである。

課題として次の3点が挙げられる。1点目は、多くの児童に主体性が見られなかったことである。2点目は、質の高い聴き合いではなかったことである。3点目は、児童の思いを大事にした学習課題として十分ではなかったことである。

(4) 2学期の実践の概要

実践①での課題を踏まえ、2学期の実践(以下実践②)では、既習事項を生かして、調べたり考えたりしたことを報告する言語活動を設定した。実践上の手立ては、次の3点であ

る。1点目は、聴き合いの話型の提示や課題解決に必要なリソースを教室の内外に用意するなど、更なる学習環境の改善である。2点目は、「論の展開」「言葉の表現の工夫」「絵の示し方」の三観点で情報を整理することができる「Yチャート」を導入することで、議論の焦点化を図ったことである。(Figure2)。

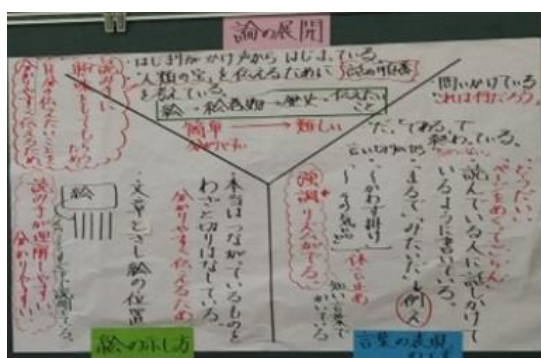


Figure2 「Yチャート」による議論の
焦点化

また、共同注視に基づくコミュニケーションの質の向上のために、4人グループに一枚の模造紙を配布し、その模造紙上で自分が書いた記事进行操作しながら、パンフレットの構成や論の進め方等について聴き合うことも行った。3点目は、目的意識をもち、かつ、解決する必然性がある学習課題を設定したことである。単元全体に関わる学習課題として「『鳥獣戯画』を読むを通して学んだ表現の工夫を使って、5年生に日本文化を伝えるパンフレットを作ろう」を設定した。また、児童の感想から学習課題「高畑さんは、なぜ日本の宝ではなく、人類の宝としたのだろうか」も設定した。

(5) 実践②における児童の学びの姿

実際の授業において、以下の児童の姿が捉えられた。1点目は、児童が自らの学びを調整する様子が見られたことである。聴き合い

を通して学ぶ過程において、児童は自らの必要に応じて学ぶための道具を選択し活用していた (Figure3)。



Figure3 自らの学びに必要なツール
を活用している児童

2点目は、互いに質問し合う姿がすべての班で見られたことである (Figure4)。



Figure4 互いに質問し合って聴き
合う児童

児童は「Yチャート」を振り返ったり模造紙上で自身の記事进行操作したりしながら聴き合いを行っていた。3点目は、児童の主体性が引き出され、自己の学びの広がり認識している様子が見られたことである。授業の振り返りに、「友達の考えから、自分の考えを広げることができた」との記述があった。

(6) 実践②の成果と課題

授業の実態から、次の3点が成果として挙

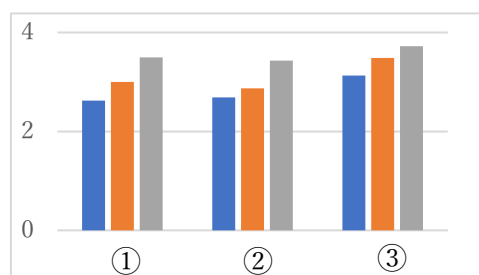
げられる。1点目は、児童主体の授業を行ったことによる主体性の向上である。2点目は、グループ全員が同じ目的に向かって一つのものを作り上げていくことができる自由度の高い思考ツール等を導入したことによる対話の質の向上である。3点目は、児童の思いを大事にし、かつ、教科の本質に即した学習課題を設定したことによる質の高い学びの実現である。

課題は、次時への学習に繋げる振り返りとして十分ではなかったことである。振り返りに「めあてについて考えることができた」のような抽象的な振り返りが大半を占めており、自らの学びを自覚する振り返りとはなっていないことが伺えた。

(7) 質問紙調査の結果と分析

授業改善の取り組みの効果について評価するため、令和2年12月、令和3年7月、12月にM市立公立小学校6年4組(32人)の児童を対象に質問紙調査の結果分析を行った。授業改善の取り組みの結果、児童が、説明文の授業を通して、①筋道を立てて考える力が高まっている、②目的をもって読んでいる、③読み取ったことを基に、自分の考えを書いたり、話したりすることについて認識の度合いが高まったことが明らかになった (Table1)。

Table1 質問紙調査の結果分析



4. 考察

置籍校でのアクション・リサーチを通して、

児童の学びの質を高める指導方法について次の3点が明らかになった。1点目は、学習環境の整備の必要性である。これにより児童の主体性は育まれたと考える。2点目は、他者と協働して取り組むことができる思考ツール等を導入することの必要性である。自他の考えを再構築できる思考ツール等を「考えの形成」や「共有」の学習過程に導入することで対話の質が向上すると考える。3点目は、児童の思いを大事にし、かつ、教科の本質に即した学習課題の必要性である。自他の考えの違いを生み出すような課題設定を行うことで、児童は主体的に取り組み、質の高い学びになったと考える。一方で、児童が次時への学びや自らの生活へ繋げていくことができる振り返りが課題として残された。今後は、児童が学びを実感し、以後の学びに繋げることができる振り返りについて考えていきたい。

参考文献

- 1) 細川太輔・北川雅浩(2018)『国語授業 アイディア事典 小学校国語科学び合いの授業で使える! 「思考の可視化ツール」』, 明治図書.
- 2) 国立教育政策研究所(2018)「OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA)」
- 3) 国立教育政策研究所(2019)「平成31年度全国学力・学習状況調査結果資料【全国版/小学校】」
- 4) 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』東洋館出版社.
- 5) R. K. ソーヤー(2018)「イントロダクション:新しい学びの科学」,『学習科学ハンドブック 第二版 第1巻-基礎/方法論-』, 北大路書房, pp. 1-13.